

国

語

(解答番号)

1

～

36

( )

第1問 次の文章を読んで、後の問い(問1〜6)に答えよ。(配点 50)

人間だけでなくすべての生きものは、その環境との境界面で、環境との最適な接触を維持することによって生命を保持している。子孫を残すために配偶者を見いだして生殖や子育ての行動を行い、寒暑や風雨を避けるために住居を確保したり居住地を変えたりし、敵から逃避したり競争相手をク(ア)チクしたりするのも、生物一般の生命維持の目的に沿ったものである。しかしなんといつても生きものがその環境から栄養を(イ)セツシユする食行動が、環境との境界における生命維持のもっとも基本的な営為であることは、異論のないところだろう。

生きものがその生命維持の行動を遂行するのは、いうまでもなく個々の個体としてである。各個体はそれぞれ固有の環境との接点で、ときには同種他個体との協力によつて、またときには同種他個体や異種個体との競合関係のなかで、自己自身の生存を求めて行動する。その場合、A ある個体と関係をもつ他の個体たちもやはり当の個体の環境を構成する要件となることはいうまでもないし、さらには当の個体自身の諸条件——たとえば空腹や疲労の程度、性的欲求、運動や感覚の能力など——も「内部環境」という意味で環境側の要件に加わってくる。そう考えると、個体と環境の接点あるいは境界というのがなにを指しているのかを一義的に確定するのはかなり困難なことになる。なによりもまず、個体自身を構成している諸条件がすべて環境ともみなされることになるなら、「個体」とはそもそもなにを指しているのだろう。ここでいわれる境界の「向こう側」にあるのが環境であるのはよいとして、同じこの境界の「こちら側」にはいったいながあるのだろう。そこに単純に個体あるいはその有機体をおくことはできそうもない。

複数の個体の場合はどうか。話を簡単にするために、互いに協力関係にある二人の人間、たとえば夫婦の場合を考えてみる。夫婦であっても、それぞれが自分自身の固有の世界を生活している独立の個人どうしであることに変わりはない。私は私の子ども時代以来の経験と記憶が集積したいまの現在を生活しているし、私の妻も同じことだ。これを単純に同化したり、いわんや交換したりすることはできない。しかしどんな夫婦でも結婚以来の、これまた他の夫婦とは根本的に違った、二人だけの共同の歴史を

もっている。そしてそれによって、何かの事態に対して、とくに口に出して相談しなくても、無意識のうちにひとつのまとまった行動をとるシュウ(ウ)カン<sup>(ウ)</sup>がついている。そのかぎりでは、夫婦をひとまとめにして一個の「個体」とみなしても差し支えない。それと同じことが家族全体とか、長年つきあっている友だちのあいだとか、共通の利害関係で結ばれたグループとかについてもいえるだろう。人間以外の動物の場合、たとえば魚や鳥の群、整然とした社会を作っている昆虫などについては、群全体がひとつの個体のように行動するというこの傾向がいつそうはつきりしている。

つまりこのような集団の場合でも、それがまとまった行動をとるのはやはり個体に準じて考えられる集団全体の存続という目的がそこにあるので、個体が生存を維持しようとする場合と同じように、環境との境界面で最適の接触を求めているといつてよい。そしてここでもやはり、この境界の「こちら側」に単純に集団全体というふうなものをおくことはできない。第一、個体の場合と違って集団には環境とのあいだの物理的な境界線などというものがすでに存在しないのだし、集団を構成している複数の個体のそれぞれが集団全体にとつての重要な内部環境になつていて、これを考えてみても、ことはけつして簡単でないことがわかるだろう。集団を構成している各個体の行動は、けつして集団全体の行動に同化しつくされることなく、個体それぞれの個別的な欲求に対応している。それぞれの個体がそれぞれの環境との境界面で独自の生命維持行動を営みながら、しかも全体としては集団の統一的な行動が保たれている。個別行動が全体の統制を破壊するような事態は、まず起こらない。

生物の個体とか、個体に準じて考えられる集団とかについて、それと環境との境界面における生命維持の営みが **B** 思いもかけぬ複雑な構造をもっていることは右に見たとおりなのだが、これがそれぞれに確固とした自己意識を持つている人間集団の場合となると、その複雑さも飛躍的に増大する。たとえば家族の場合、外部環境との接触面では比較的まとまった行動を示す家族でも、家族の内部では個人個人の自己意識と自己主張が動物の場合とは比較にならぬほど強く表面に出る。個人の個別的な行動が家族全体のまとまりを破壊するような場合もけつして稀<sup>まれ</sup>ではない。ここでは、人間以外の生物には出てこないような「私」と私以外の「他者たち」との対決が、集団としての家族のまとまりよりも明らかに優位に立っている。それと同じことが家族以外でも人間集団のあらゆる場面で見られることについては、いちいち例を挙げるまでもないだろう。

自己意識がどのような経緯で人間に備わったものなのか、それにはさまざまな仮説が可能だろう。しかしいずれにしても、それが「進化」のひとつの産物であることは間違いない。進化の産物だということは、生存の目的にかなっていないということである。自己意識を身につけることによって、人間は環境とのセツ<sup>(E)</sup> ショウの中で新たな戦略を手に入れた。ところが、元来は生存に有利であるはずの自己意識が、同じく生存を目的としているはずの集団行動と、ときには真つ向から対立することになる。ここに<sup>C</sup> 生物としての人間の、最大の悲劇が潜んでいるのだろう。自己意識という人間の尊厳に、それ本来の意味を取り戻させるためにはどうすればよいのか。

「私」の自己意識は単なる個体の個性の意識ではない。個体のそれぞれが自分は他の個体と別個の存在だということを認知する程度の意識なら、おそらく他の多くの動物にも備わっているだろう。明確な個体識別能力を持っている動物は少なくないし、他個体の個体識別と自己認知とは同じ一つの認知機能の両面である。それとは違って、人間は自分自身をほかならぬ「私」として意識し、この一人称代名詞で<sup>(注1)</sup> 言表される存在に、他のすべての個体とは絶対的に別次元の——他のもろもろの個体間の差異とは絶対的に異質の特異な差異でもって他者から区別される——唯一無二の存在という特権的な意味を与えている。「私」というのは、いわば等質空間内の任意の一点ではなく、むしろ円の中心にたとえられるような、それ以外の一切の点と質的に異なつた特異点である。

このような「私」としての自己と他者たちとのあいだにも、精神分析のいう「自我境界」という形での境界線を考えることはできない。ふつうにいわれる「自他関係」とは、この境界線上でかわされる心理的な関係ということだろう。そこではやはり境界をはさんだ二つの領域が想定されていて、他者は外部世界に、自己は内部世界におかれることになる。<sup>D</sup> しかしそのようなイメージは、特異点としての「私」という自己を考える場合には適切でない。「私」が円の中心だとするならば、私以外のすべての他者は中心の外に在ることになる。「私」自身ですら、これを意識したとたんに中心から外へ押し出される。しかし中心には内部というものが無い。あるいは中心それ自身を「内部」と見るなら、中心は「内」と「外」の境界それ自身だということになる。「私」と他者との関係もそれと同じで、「私」は「内」でありながら「内」と「外」の境界それ自身でもあるという非合理的な位置を占めている。「私」と

は、実は「自我境界」そのものことだといっている。

等質空間に引かれた境界線と違って、生命空間における個体と環境の境界は、その「こちら側」にあるはずの「内部」をもたない。同じことを別の言い方でいうなら、生きものそれ自身とそれ自身でないものとの境界そのものとして、この境界を生きている。この自己と他者の「境界」を、生きるだけでなくはつきり意識するところに、人間的な自己意識が生まれる。そしてこのことは個々の個体だけでなく、集団全体についても同じように言える。人間の場合、「私」だけでなく「われわれ」もやはり他者との境界を生き、そしてそれを意識している。

生命の営みは、これを物理空間に投影してみると、すべて境界という形をとるのではないか。逆に言つて、われわれの周りの世界にあるすべての境界には——空間的な境界も時間的な境界も含めて——そこにつねに定かならぬ生命の気配が感じられるといつていい。この気配こそ、境界というものを合理的に説明し<sup>(注1)</sup>つくせない不思議な場所<sup>(注2)</sup>にしているものなのだろう。境界とはまだ形をとらない生命の——<sup>(注2)</sup>ニーチエの言葉を借りれば「力への意志」の——住みかなのではないか。

(木村敏<sup>きむらびん</sup>「境界としての自己」による)

(注) 1 言表——言語によってなされた表現。

2 ニーチエ——フリードリヒ・ニーチエ。ドイツの哲学者(一八四四—一九〇〇)。

問1 傍線部(ア)～(オ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

1  
～  
5。

(ア) クチク

1

① 資料をチクセキする  
② ボクチク業を始める  
③ 経過をチクジ報告する  
④ 彼とはチクバの友だ  
⑤ 独自の理論をコウチクする

(イ) セツシユ

2

① セツレツな文章  
② 自然のセツリに従う  
③ 試合に勝ってセツジヨクを果たす  
④ 訪問者にオウセツする  
⑤ クッセツした思いをいだく

(ウ) シユウカン

3

① 勝利にカンキする  
② 国境線をカンシする  
③ けが人をカンゴする  
④ 血液のジュンカン  
⑤ 今までのカンレイに従う

(エ) セツシヨウ

4

① 依頼をシヨウダクする  
② 事実をシヨウサイに調べる  
③ 意見がシヨウトツする  
④ 外国とコウシヨウする  
⑤ 作業工程のシヨウリヨク化をはかる

(オ) ツクせない

5

① ジンソクに対処する  
② テキジンに攻め入る  
③ 損害はジンダイだ  
④ ジンジョウな方法では解決しない  
⑤ 地域の発展にジンリヨクする

問2 傍線部A「ある個体と関係をもつ他の個体たちもやはり当の個体の環境を構成する要件となる」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6。

- ① ある個体にとって、種の存続を担う子孫のような存在に加え、配偶者をめぐって競い合う他の個体もまた環境の一部となること。
- ② ある個体にとって、食物をめぐる争いの相手に加え、協調して生活をしていく異種の個体もまた環境の一部となること。
- ③ ある個体にとって、空腹や疲労のような生理現象に加え、生息圏に生い茂るさまざまな植物などもまた環境の一部となること。
- ④ ある個体にとって、気象のような自然現象に加え、食行動などの場面で交わる他の個体もまた環境の一部となること。
- ⑤ ある個体にとって、自らの生命維持に必要な自然の空間に加え、他の個体と暮らすための空間などもまた環境の一部となること。

問3 傍線部B「思いもかけぬ複雑な構造をもっている」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、

次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7。

- ① 外部環境に対して一個体のように見える集団であっても、その内部環境を構成する各個体は集団からの自立をはかることで個体としての存在を保っている。それゆえ、内部環境は緊張関係を常にはらんでいるということ。
- ② 外部環境に対して一個体のように見える集団であっても、生命維持の具体的な局面においては内部の個体相互の利害関係が表面化しやすい。そのため、実際には集団行動の統一性の内実が常に変容しているということ。
- ③ 外部環境に対して一個体のように見える集団であっても、その内部環境を構成する各個体はそれぞれ自由に行動している。ただしそこでは、集団として常に最適な結果を生み出す調整がはかられるということ。
- ④ 外部環境に対して一個体のように見える集団であっても、統制の破壊行動を起こす個体が内部に生じることもありうる。しかしながら、各集団の生命維持行動においておのずとその可能性は封じ込められるということ。
- ⑤ 外部環境に対して一個体のように見える集団であっても、その内部環境を構成する各個体は個々の欲求に基づいて活動している。それにもかかわらず、生命維持に必要な集団のまとまりは失われないということ。



問4 傍線部C「生物としての人間の、最大の悲劇」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の

①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 8。

- ① 人間は自己意識を備えることで、より環境に適した接触が可能になったが、場合によっては個体の意識と集団の目的とのあいだに矛盾が生じ、集団を崩壊に導くような事態や個体の存続を脅かす現実さえ招くようになるということ。
- ② 人間は自己意識を備えることで、他の生物には見られない強固な集団維持という目的を共有する社会を形成したが、場合によっては集団全体の統制を優先して、個体の欲求を抑圧する状況が生み出されるようになるということ。
- ③ 人間は自己意識を備えることで、より環境との調和をはかるようになったが、場合によっては生存競争において他の生物との対決能力が弱まり、種の存続が危ぶまれる可能性をも抱えるようになるということ。
- ④ 人間は自己意識を備えることで、他の生物から戦略的に身を守るようになったが、場合によっては集団を防御する意識が過剰になり、集団間の利害をめぐって他の生物には見られない形の闘争が起こるようになるということ。
- ⑤ 人間は自己意識を備えることで、より有利な環境との接点を獲得したが、場合によっては環境に大きな変化をもたらす、自らの集団維持行動が脅かされるほどの深刻な事態に陥るようになるということ。

問5 傍線部D「しかしそのようなイメージは、特異点としての『私』という自己を考える場合には適切でない。」とあるが、筆者はどのような考えから適切でないかと判断しているのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 9。

- ① 人間の認知機能を他個体と自己とを識別するものにとらえる見方は、自己と他者とのあいだに引かれた絶対的な境界線の存在を前提にしているが、自己を円の中心のような存在であるとみなす場合、「私」の内部世界の意味が変わり境界は相対的なものになってしまふという考え。
- ② 世界の中での特異な自己の位置を定める精神分析的な「私」のとらえ方は、境界線を等質空間に設定することで安定的に成立するが、自己意識としての「私」は境界線上に位置しているので、必然的に他者に対して自らの特権化しすぎてしまふという考え。
- ③ 他者の属する外部世界との対立関係で自己をとらえる見方は、境界に隔てられた空間的な内部世界を想定しているが、絶対的な異質性をもつ「私」の自己意識は内部空間をもたない円の中心のようなものであり、むしろ他者との境界そのものにほかならないという考え。
- ④ 個体の外部に境界を設定して自己の絶対的な異質性を確立する「私」の世界のとらえ方は、特権的な一人称代名詞のはたらきによって強く支えられているが、他者も同様な言語のはたらきによって内部世界をとらえているとすると、境界は共有されることになってしまふという考え。
- ⑤ すべての他者を外部世界に置き自己を内部世界に押し込めるような「私」のとらえ方は、認知機能上の絶対的な境界線を想定するものであるが、当の内部世界にある自己意識は自らが空間的中心にあることを合理的に証明できないので、「私」はむしろ境界線上にあるといわざるをえないという考え。

問6 この文章の論の展開に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 10。

- ① まず、環境との境界面における生命維持の営みについて、個々の個体の場合と複数の個体の場合との異なりを明らかにしている。つぎに、問題は集団と自己との関係性にあるとの指摘に及ぶ。最後に、人間の自己意識が自己と他者の境界にしか生まれえないとの結論づけを、生命の営みを物理空間に投影する方法によって立証している。
- ② まず、環境との境界面における生命維持の営みについて、群全体や家族全体という集団の場合を対象として考察している。つぎに、個の集団に対する関係がその複雑さを増大させている、との指摘に及ぶ。最後に、個々の個体だけでなく集団全体においても他者との境界を生き、それを自己が意識している、との結論を検証している。
- ③ まず、すべての生きものが、その環境との境界面で、環境との最適な接触を維持することによって生命を保持している、との結論を明示している。つぎに、冒頭の結論を個体と集団との場合にあってはめて検証する。最後に、個体と環境との境界における生命の営みの観察を説明することから冒頭の結論へと再び立ち戻っている。
- ④ まず、環境との境界面における生命維持の営みについて、個体と集団それぞれの場合を対象として考察している。つぎに、他の生物に比して人間の場合は、自己意識の存在が集団と個体との関係を難しくしている、と指摘する。最後に、人間の自己意識は境界を意識するところに生まれ、そこに生命の営みがある、という結論に導いている。
- ⑤ まず、環境との境界面における生命維持の営みについて、その境界には何があるのかという問題を提示している。つぎに、その問題を一般化するために自己意識の存在に着目する。最後に、「私」をはじめ「われわれ」人間、さらにすべての生きものにおける生命の営みは、境界といわれる場でしか十全な形にはなりえない、と結論づけている。